

2017年度北海道大谷学園連合会
高等学校相互評価報告書

対象校 稚内大谷高等学校



評価校：北海道大谷室蘭高等学校

(実施日：2017年12月4日)

2018年3月31日

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

- | | |
|----|-------------------------|
| 主査 | 藤野 明信（函館大谷学園専務理事） |
| 委員 | 堀 武（大谷学園委員会委員、元北海道学事課長） |
| 委員 | 金石 潤導（真宗大谷派北海道教区教化本部長） |
| 委員 | 大西 正宏（帯広大谷高等学校校長） |
| 委員 | 小野 茂（帯広大谷高等学校教頭） |
| 委員 | 越後屋 亨（稚内大谷高等学校教頭） |
| 委員 | 南條 式史（北海道大谷室蘭高等学校教頭） |
| 委員 | 佐藤 健一（函館大谷高等学校事務長） |

稚内大谷高等学校の概要

設置者学校法人 稚内大谷学園

理事長名 吉田幸麿

校長名山下 優

開設年月日 昭和38年2月28日

所在地稚内市富岡1丁目1番1号

設置学科 普通科

定員 各学年90名 270名

教職員数 26人（常勤・非常勤含む）

I 建学の精神・教育の理念・教育目標・学校目標

稚内大谷高等学校は昭和 38 年女子普通科として設立され、昭和 43 年男女共学となった。

稚内大谷学園は「仏教の精神を基調とした全人教育を行い、世の光明となる人格を養成する」ことを建学の精神として、「報恩感謝・和顔愛語・自己反省・学業一体」の校訓の元、人間教育にあたってきた。理事長・学校長が様々な儀式の時に建学の精神に触れる講話をのべる機会を持ち、また、4 月に行われる職員校内研修においては、建学の精神を根幹とした教育活動の具体的展開を学び合う機会を設けている。特に校内研修においては建学の精神を根幹とした教育の具体的展開が全職員に共通理解されるべく工夫が為されている。注目すべきは、基本的な考え方『教育の中心に生徒を据える』という明確なコンセプトのもと、稚内市民の負託に応える教育の実践を強く意識しながら、学校作りに取り組んでいる点である。市民立的学園との認識の下、「心の教育を基礎として、確かな人格を育成する」「社会に有為な人間力の育成」「個に応じた進路の実現」という教育の使命を自覚しながら、「いのちの尊厳を理解し、豊かな人間性を身につけた生徒」・「北海道の将来を担う人間力となる生徒」・「文武両道を歩み、意欲と規律を持った生徒」の育成に邁進している。独自の教育実践を行う本学園は、他の公立高校との明確な差別化を模索し、改革への大きな意志を持って教育活動を行っており、地域における存在意義をますます高めていくものと評価できる。

II 分掌

【教育課程・学習指導(教務)】

「生活福祉介護技術」等の選択教科や危険物取扱等の資格取得の講座などが充実しており、生徒や保護者のニーズに応え、卒業後の進路に結びついた授業展開の実施、さらに地元の企業と連携したインターンシップ（2年生全員）の取り組みなど、地域に根差した教育活動が評価され、生徒の大部分が資格、就職、進学、クラブなどの目的意識を持って、稚内大谷高校に入学していると思われる。

各教科で年間指導計画、月間指導計画を作成し、管理職が授業を参観し確認を行っていることや、生徒や保護者の視点に立った授業アンケートを実施することにより授業の改善、向上に結びつけている。また、入学時に保護者・生徒に教育課程表や評価方法について保護者に説明行なっていることや、授業アンケートの結果を P T A や評価委員会、ホームページ上に公開するなど、開かれ

た学校としての高い意識が感じられる。

ここ数年で退学者、転学者の人数が著しく減少している要因は、明確な目的意識をもった入学者の確保、入学者の学校生活の様子を出身中学校への提供（1年生の5月）、そして担任を含む教員間との「連携の緊密化」などの結果と思われる。出席率が99%に達しているのはこれらの結果であり、これらの取り組みは高く評価できる。

【生徒指導・部活動(生徒指導・生徒会)】

生徒指導三訓「1. 挨拶の励行 2. 時間の厳守 3. 服装の徹底」を中心に生活指導目標を掲げ、年間指導計画、2か月ごとの生活重点目標を作成し、校内掲示によって徹底を図っている。

また、保護者による生活指導モニターにより、校外での生徒の様子を把握するなど、きめ細かい生徒指導が行われている。

約65%の生徒がクラブに所属しており、学校祭等の行事もクラブの大会時期とずらして実施するなど、クラブと学校行事の両立を図っている。

【進路指導】

1年生の進路オリエンテーションやキャリア教育、職業別ガイダンス、2年生でのインターンシップ、3年生の志望理由書の書き方や面接の練習など、各学年での進路計画が明確にされており、生徒が安心して進路に向かうことができる環境が整備されている。

さらに、教育内容の充実が進路面にも表れており、進学・就職共に生徒をバックアップ（教員全体で取り組んでいる＝誰でも進路指導ができる）し、希望の進路に結び付ける体制を整えている。資格取得やインターンシップの取り組みが地元企業への就職に結びついており、また、進学実績も向上していることは評価できる。

【保健管理・安全管理・個人情報管理】

危機管理マニュアルの整備により、事故対応や個人情報の保護などの安全管理や個人情報管理に対する対応が明確化されている。

【入試・生徒募集】

6月には市内の4つの中学に管理職・入試担当・強化クラブ顧問（5クラブ）が訪問し説明会を実施、7月～9月上旬に宗谷管内・留萌管内一部の各中学校に入試部が学校案内と募集要項を持参し、学校概要や奨学生出願などの説明を

行っている。

そして9月末には5日間にわたって学校開放見学会を実施し、管内各中学校3年生に教頭・入試部によりオリエンテーション及び授業見学、施設見学等を実施しており、地域に密着した生徒募集が行われている。ここ数年、定員を超えているのもこうした地域の中学校と連携した地道な取り組みの成果であり、大いに評価できる。

【地域活動】

庶務部発行の「PTA活動便り（年3回）」「PTA会報（年1回）」、生徒指導部発行の「菩提樹（年6回）」、広報誌担当が発行する「想望（年3回）」などにより学校の様子を家庭や地域に伝える努力をしている。

全校でのペットボトル回収ボランティアは企業や市民にも協力を依頼し、全校生徒でシールはがしや仕分けを行っているとのこと。毎年実施しているので、企業・市民が学校に届けてきてくれるとのこと。また、生徒会による学校周辺の掃除や野球部の交通安全駅伝走、運動クラブによる独居老人宅の除雪など地域に密着したボランティア活動の取り組みを行っており、地域貢献と共に教育的な効果も大きく、大いに評価できる。また、地域に密着した数々の活動が、地域の学校として認知されることにつながっていると考えられる。

【図書館等】

司書教員がいないため、教務部から図書館担当者を設定しているが、集中的に図書整理などは行うことができない状態にあるとのことである。こうした部分が改善され、図書館がより、活用されるようになっていくことが必要であると考ええる。

【まとめ】

稚内大谷高校は、伝統をしっかり受け継ぎながら、地域に根差した教育を押し進めている。ほとんどの教員が20～30代と若い教員団であるが、教員間の連携を重視し、移転したばかりの校舎で、先生方も生徒達も新鮮な気持ち着実に学校づくりを進めていることが、随所にうかがわれる。2016年入学生から制服も変更したとのことであり、伝統を受け継ぎながらも、現状に甘んじることなく、新しい風を起こそうという気概がうかがわれる。

生徒指導、学習指導、進路指導、課外活動など、いたるところに目を行き届かせ、ていねいに指導し、実績を積み重ねていく稚内大谷高校の取り組みは、大いに評価できる。

Ⅲ 管理運営（ガバナンスの確立）

北海道最北端、人口減少の加速化の中で宗門立の学園として稚内市民立的学園を認識する中、地域との連携のもと、学校作りに積極的に取り組んでいることはひとえに理事長・校長の強力な指導力によるものが大きい。地域から愛され、信頼される学校作りを地道に実践しており、稚内市民における稚内大谷の存在感は年々高まっている。

今後とも魅力ある学園作りにおいて、理事長・校長の指揮の下、年齢層の若い教員が一致団結して学校作りに邁進していけると確信している。

Ⅳ 財務

「少子化」は終わりに近づき、「少子」に突入しようとしている今、各校が入学者確保に向け、様々なアイデアを駆使しながら教職員が一丸となって努力をしている。なぜならば、最大の収入源である「学生生徒等納付金」に直結し、経営（教育の質を含め）を左右するからである。

帰属収入－消費支出＝帰属収支差額は学校法人の余剰額（収益性）を表す基本的な物差しであり、学校運営にあたり全職員が経営的視点で考える必要があると思われる。

稚内大谷高校の各種奨学金制度や進学特別クラブ「大谷塾」の開設等で、特色を前面に出した「ソフト」が構築されたことは評価される。

私学の一番の売りでもある「建学の精神」を具現化し、公立との違いを打ち出しつつ、地域と連携しながら学校運営に当たっていることは、校長先生の強いリーダーシップによるものと思われる。